

一九の創作姿勢に関する一考察：享和期の読本と黄表紙を題材として

康, 志賢
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/9396>

出版情報：語文研究. 85, pp.26-41, 1998-06-05. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

一九の創作姿勢に関する一考察

——享和期の読本と黄表紙を題材として——

康 志 賢

寛政八年、長谷川町の町人某の後家へ入贅した一九は、吉原遊びがこうじてか享和元年離縁され、生活を営むためであつたらう、手あたり次第に戯作の筆を取る。享和元年には鹿島詣での旅にも出ているので大体半年間の執筆で、享和二年に一九は凡そ二十八種の戯作を出している。それも黄表紙十三種のうち八種、洒落本九種全作、読本二種全作、滑稽本二種全作を自画でやっている上に、感和亭鬼武の黄表紙の画者をも勤めながらである。他に咄本と往來物を一作ずつ刊行、狂歌絵本にも彼の名前が見える。更にこれらの作品のほとんどの版下書きも自らやっていた。

このような、他に例を見ない活躍ぶりには「濫作」という言葉だけではかたづけ切れない、一九の多才さをかいまみることが出来る。草双紙の作者として一番多作の人でありえた原点を、先ず享和二年から探っていききたい。今まで言われてきた通り、そういう多作の中には安易に出すために書きあげ

られた作も混在するだろうが、多作を成し遂げるために一九が取った方法こそ、彼が初めて成功させた彼なりの創作方法であつたし、そういう創作姿勢が同年に『膝栗毛』をも生み得たのである。

一 「深窓奇談」と「美男狸金箔」

享和二年は一九が読本の処女作を出す年でもある。そして一気に二十九余りの作をあらゆるジャンルで出すにあたって、一九は同じ素材・世界を読本と黄表紙で使っていた。例の一九の癖、二番煎じという安易な方法を使ったからそのような膨大な作品も刊行出来たのだろうと、ここで一九の創作姿勢を非難することはたやすいことかもしれない。しかし、両作品を対照することによって、一九という作者の中で読本と黄表紙はどういう意味を持って理解されていたか、がわか

るといふ興味深い事実を見逃す手はない。当世に受け入れられた彼の焼き直しの方法を通して、同時に当代の戯作者のジャンル認識の一端もかいま見ることが出来るからである。

その好都合な作品というのは、『深窓奇談』五巻五冊全十話の内、巻三の第一話「古狸你女が憶念を廃して恩に報ふ」全十二丁（内二丁は挿絵）と、『美男狸金箔』三冊全十五丁である。

一方、この両作品を指摘された中村幸彦氏は、続けて、「同じ洒落や地口があれこれに目立つ。着想の欠乏と文章の不洗練」という評価を下している。このようなマイナ斯的評価だけで埋もれてきた作品に、敢えて光を当ててみようを試みるのは、当時世間一般に行われていたジャンルの枠を一九がしっかり認識し、そのジャンルに遜色がないように、読本の世界を黄表紙へ焼き直し、そのために施した工夫を考察することによって、多作家でありながらも人気作家であり得た、その技量を確認したいからである。

主人公は読本では九州大内家但馬守為勝で、「下を寧じ、上を安んずる」君であった。黄表紙では西国探題九州松尾城主が隠居し、その後を継いだ若殿右馬之丞で、「下をいたわりおご」らない君であった。『美男狸金箔』自序に「西国宇佐美家乃新話。狸乃心中せし。物語乃実説を搜。……」というのが見える。舞台を江戸以外の上方西国、更に九州に求め、由来

譚に絡めた動物の報恩譚や怪異譚を折り込むという一九の読本の特徴は、既にこの享和二年に現われている。大阪での浄瑠璃作者として修業中に培われた、実録・民譚類の扱い方は、この年以降も諸国を旅行することによって徐々に成熟していくのである。

為勝は「古語に女は青蛇の如し……」故に生涯一人身であると言いつ張っていたが、老臣岩出貞明に「是となるか、非となるか、善悪は君にあらん、……英雄の血脉連綿として、敢て他家の嗣君を容れず、」と諫められ、あまたの傳女侍女の中から選ぶことにする。しかし、黄表紙では奥様なくては血脉が絶える」と評議する家中たちに右馬之丞が耳を貸さない理由は、実は器量は良いが嫉妬深い女中お吉の色に耽っていたからであった。

そして城主が隠居したいと言いつ渡す場面らしい挿絵で、黄表紙としての特権を発揮した場違いな会話がなされていて笑いを誘う。「(家臣) せっしゃなどハこの間も。よしわらへまいつて、おぎ江藤四郎と申すげいしゃをよびましたが、うけたまわれバ一九がてうしから、つれてまいつたげいしゃそふでござるが、おもしろいやつでござる。」という楽屋落ち的な発言に対して「(御隠居) このせききにやわぬおはなした。」と真面目に応答するのは、むしろとぼけによる滑稽と同じ効果を上げてくれる。ここで話題になっている萩江藤四郎は、一九の作品にはしょっちゅう顔を出して宣伝される男芸者で

ある。^注

一方、嫁選びは読本だけに構成された場面である。為勝は「真直なる文字を丸めて又横に伸てゆがめる暁のかね」という歌の情を会得した女を求めていた。ある夜「しのべ」とその心を解いた侍女狭衣が忍んで来ると、その才を喜び、契りを交わしてから為勝の寵遇は甚だしくなった。そんな中、南条政任の娘から申入れが有り、家臣たちは大喜びしたが、「狭衣愈恨罵り、嫉妬の残懷充蔓して、一心遂に癡狂しければ、老女綾瀬は直ちに人をして、狭衣を宥めさせ、詐て駕に打乗せ、彼が宿所に送やりぬ」ということになる。

黄表紙では読本と筋書きの順番が変わる。即ち、右馬之丞とお吉との関係をお局の知らせで知った家中たちは、嫉妬深くては妾にも出来ない、奥様より代参を命じさせ、自分の宿に着いたところ、家老石の上三太衛門が暇を言い渡すと、お吉は狂気を起こすという順序になる。

即ち読本の方は、家臣の助言で嫁選びに入った中で侍女狭衣と深い仲になり、その後南条家との婚姻の話が出、嫉妬に狂乱した狭衣を実家に戻すという順番なのに対して、黄表紙の方は、話が始まる前から既に女中お吉と出来ているという前提が有り、婚姻の申込みが来る以前に、実家に戻されて、それから狂乱するという順になっている。また、読本では狭衣を騙した口実が書かれていないが、黄表紙では「代参」というふうに明記されている。ここで読本の方がもっと激しい

用語を使い、おどろおどろしい雰囲気を出しているのもわかる。

黄表紙の続きである。やがて千石の大守某殿の姫君から申入れが有り、婚姻の夜、悪魔払いとして来ていた醜い顔の女中が段々鬼女の如くなり、怒り罵るので大騒動になる。みんな怖くて逃げ回る中で、一人ぼつんと正座して「(女中)私がよく美しいものを、なぜそんなにこはがりなさるへヲホ、。と、すましているというか、とぼけているというか、鬼女の顔の挿絵が可笑しい。まさに口裂け女の図になっている。この鬼女の段は黄表紙だけの趣向である。

家老たちと局はお吉の執念が乗り移ったものと心配したが、世間に知られては悪いと思つて、右馬之丞は急病だと偽り、祝言を延引してもらう。

読本の方では、婚姻の日、急に為勝本人が本当に寝込んでしまい、婚姻は延引になる。為勝の急病の原因を突き止めるために岩出は為勝の寝所を伺っていた。そして狭衣が添い寝しているのを見て切りつけるが、「形容陽交の如く髣髴」となつてしまった。挿絵には雨の夜、涙を拭きながら枕を抱えて立っている狭衣と、今にも切りつけようと刀に手を掛けた岩出が描かれている。ここに描かれた狭衣と、黄表紙で夢の逢瀬を果たしに右馬之丞を訪れるお吉とはずいぶん雰囲気が違うようである。嬉しい恥ずかしいと言わんばかりのお吉の表情・姿に比べ、髪を振り乱した狭衣にはどこか哀願してい

るような悲しさがある。それから「生霊形容を現ずること」無しと、狸のせいにした岩出が、愈々狸狩を思い付くのである。

一方黄表紙で、泣き明かす毎日のお吉は病気になるが、毎夜右馬之丞と契る夢を見る。同じく毎夜契る夢を見るようになった右馬之丞も本当に病気になる。その夢でお吉は、

たとへたれがいかやうにもふすとも、ひめぎみと御しうげんをあそばしますなへ。もしもさようなことがござりましたら。じきにあなたのおいのちがござりますまい。

と脅かしたりして執念深さを見せるので、その悩みを家中に打ち明けた右馬之丞は、加持祈禱してもらうが効き目はない。それで狸狩に至るのであるが、その経緯を黄表紙と読本で読み比べるしてみると、一九は同一内容をジャンルに合わせるとどのように書き替えているかが分かる。

いしのうち三太へもんどの申されけるハ……おきちしゝたるといふにもあらず。もっともいきりやうといふことハあれども、いきりやうにかたちをあらはすいわれなし。このおにはにむかしよりのためきすみて、よく人のきよをうかざひ、かゝるあやしきことをなし、人をそのふこと、むかしよりのたびくのことなり。しかればこのたびのようくはいも、まさしくこのためきがしわざならん。わかとのゝ御びやうきにつけこむとみへたり。このおにはにすみながら、わかとのをたぶらかすこと、き

くはいなり。いそぎおにはのすみくをせんさくし、たぬきがりをなす、といはれければ、

という黄表紙と同じ内容を読本では

岩出復思推するに、凡嫉妬深き者、頑心一に混塊して、死後靈と成、其仇を報ふ例、和漢新古とも稍からず。爾るに彼は壯健なり。生霊形容を現ずること、身外身の妙術は幾乎知らず。亡霊の形は、物に着するの氣、存するに因てなり。生身の氣は須臾も離れず、何に仍てか、他に其景光をあらはさんや。倩意に、往時より当家の後園に、狸栖て、克斯る怪異をなす。人虚するに迫んで、鬼邪の爲に犯さるゝこと、其証あり。是正に古狸の所行必然たり。第中に住で君を煩す、畜獸の業悪、此上は草莽を綴て、彼が巢穴逐一に穿鑿し、打斃して此禍を除くべし、

というふうには、漢文調の術学的姿勢を見せる。

読本を判り易い文章へ換えて合巻化するという文化・文政期の流れを、既に一九は享和二年の黄表紙の時点で実践していることがわかる。そして一九の場合も同時出版であったから、どちらを先に執筆したのか分りかねるので、逆に草双紙を読みづらい文語体文章の読本へ書き換えたとも言えるだろう。とにかく、後世、一般的に読本を草双紙化する時はコンパクトに纏める傾向が出て来るが、一九の享和二年の時点ではその傾向はまだ薄い。それでなのか、寛政九年武内

確齋作の読本『絵本太閤記』を翻案した、享和四年の一九の黄表紙『化物太平記』程の穿ちや滑稽性は、『美男狸金箔』ではあまり感じられない。せいぜいこの場面であら、石上三太衛門が「われながらせっしゃハ、なるほどはつめいなものでござる。」と自惚れたり、家臣が「これハよいおぼしめしつきでござる。せっしゃなどハたぬきじるがかうぶつでござる。」と余計な無駄口を叩くことによつて、読本のような厳肅な雰囲気から離れ、所謂登場人物がふざけた会話を交わすよう仕向けられたことによつて、話題が卑俗化し、そこから笑いが出て来るくらいだろう。

こうして狸狩を決心した岩出と石上の各々の夢に現われた狸は、読本でも黄表紙でも似たような哀願をする。自分の一命は惜しくないが、かの女中の科を負わされ妻子親類まで殺されるのは不憫でならない。若君の病気を直し、女の恨みも出来ないように致すから、狸狩は止めてくれという訴えであった。

それではばらくの猶予となり、読本の方では、ここで初めて病の床に付いた狭衣が毎晩為勝の寝所に通う夢を見るところの描写が出て来る。そういう毎日を送っている狭衣のもとに、或る夜為勝が忍んできて

迎も互に一命存して、値遇の縁を結ばんこと難ければ、
俱に冥間に帰き、永劫の末を快く契らんと思ふのみなり。

と持ちかけると、狭衣は喜んで承諾する。それで為勝は漢詩を、狭衣は和歌を一首ずつ辞世の句のように詠んで自殺するのである。狭衣の母は娘と一緒に死んでいるのが畜獣だと分り後を追つて自害する。

この辞世の句を詠むところと母親の自害するところは、黄表紙にはない場面である。和歌は嫁選びの決め手としても使われたが、世を去る時も雰囲気を盛り上げる役割を果たし、読本の方だけで使われた趣向である。強いて言うなら読本の主人公二人は歌の縁で結ばれ、また歌を詠むことによつて快く死んでいけたのである。そして主人公の名前からしても読本と黄表紙とは差を置いているのがわかる。時代背景をまさに中古と近世に各々置いたかのようである。

狸狩が猶予になつてからの黄表紙の内容は、読本と少し変わつて来る。お吉は姫君を呪つて毎夜社へ詣で神木に釘を打つていたが、或る夜その場面を右馬之丞に目撃される。ここでまた姫君が話題に上るのであるが、読本の南条家の娘に比べて黄表紙の姫君は断然比重が重いのが分かる。お吉は右馬之丞の夢に現われ、姫君と結婚すればあなたを殺すと脅したり、丑の時参りをして姫君を呪つたりするくだわりぶりを見せるのである。微妙に生々しく土臭い匂いを漂わせる為に、姫君が黄表紙では使われているような気がする。読本では南条家の娘という、抽象的肩書きの存在で十分であったが、草双紙では現実的で俗っぽい直接的・積極的行動を起こ

すお吉に相応して、姫君にも現実性・積極性を付与したのである。また後に狸の塚を建てる時も、姫君の指図を蒙るという場面が出てくる。

右馬之丞は、丑の時参りまでするその方の志に感じて、今日から毎夜通い、末長く契りたいと言って、お吉を喜ばす。その後右馬之丞の病氣は完治し、家中が喜ぶ。

毎夜忍び来る右馬之丞と契ることが出来、お吉の執念が消え、右馬之丞の病氣は治ったが、お吉の方はまた床に付き、母親の介抱も虚しく瘦せ衰えていくばかりであった。挿絵で病の床に付いているお吉を尋ねている者は、「右」という文字が刻まれた袴を着ているが、頭だけは狸である。一方読本も二つ有る挿絵の中で残りの一つがこの場面を描いている。やはり患者の鉢巻きはしているが乱れた髪（この前の挿絵でも狭衣は髪を振り乱している。お吉は一応きちんと髪を結い上げている。）の狭衣を尋ねている者は、垣根の表でちゃんとした為勝の姿をしているが、狭衣の前では狸そのままの姿をする。

為勝狸が初めて忍び込んだその日に心中まで踏み込んだり、お吉が心中してから為勝の病氣が治ったりする読本の進行に比べて、黄表紙ではこのように右馬之丞の病氣が治るまで毎夜お吉のもとを訪れている等、随分ゆっくりとことが運ばれる。

そして今度、右馬之丞の夢に現われた狸は、石上三太衛門

様へ約束した通り、君の病氣を治し、猶も女の執念が残らないように一緒に心中するのも、子供の為のことだから狸狩は止めてくれと重ねて頼むのである。これも読本には無い場面である。黄表紙の狸は自分の功労を公示する、このような積極的アプローチに出ることを見ると、読本の狸に比べ彼はどうも外向的性格のようである。

読本では狭衣の母親の自害後、狸の業績を讃える文が来てから、次のような場面面で幕を降ろす。

為勝、句餘の後其疾全快し、南条家の家女を迎えて、復び交婚の規式、故障なく整ひしは、偏に古狸が報ずるの洪福なりと、頓て其墳を築き、僧侶に命じて、永く亡霊の祀事怠らずといふ、忱に靈異の鑿説なり。

この所が黄表紙ではもっと詳しく二丁に渡って語られる。それで姫君にもスポットを当てた点と、今も狸の墓が西国に残っているという追加説明が付いている点がまた違うところであろう。

そして次の会話は、重くなりがちな読本の雰囲気崩す形で、黄表紙の猥雑・卑俗化による笑いを誘う。

（侍女）わたくしもどふぞ、たぬきでもむじなでもいゝから、びやうきのであるほど、そんなめにあいたいものでござります。

（石上）しかしたぬきめハ、いのちハすてましたが、よいたのしみをいたしましたらふ。

そして家来が狸塚の前で「なむあみたぬきく」という地口を吐くことで、黄表紙は幕を閉じるのである。

同年同作者が刊行した同世界を扱った別ジャンルの作品に於いて、後の文化文政期の読本と合巻の關係のように、一方が他の方を簡略化ないしダイジェストするのではなく、この読本『深窓奇談』と黄表紙『色男狸金箔』は、各々独立した読み物として焼き直されていることが分かった。そしてジャンルの特性から割愛しなければならないところを、一方のジャンルで描写している。例えば黄表紙の方だけに描写された場面を読み合わせる時、読本の世界はもっと豊かに広がるのである。

お吉に暇をやる口実として「奥様の代参」と言いつけて騙す場面、悪魔払いの女中が鬼女の顔へ変ずる場面、お吉が姫君を呪う言葉を吐いたり、丑の時参りをする場面、狸が馬之丞の夢にまで現れ、自分の功績を述べて狸狩りの中止を申し出る場面等々である。逆に読本だけの場面というと、歌を挟んだ嫁選びと自害の長い場面がまず挙げられる。

従って筋書きの順番も入り乱れたりする。それは勿論、両作を読んでくれることを期待した作為的手法ではなく、一九のジャンル認識に基づいた自然的結果であって、各々の作品は独立した面白みを保った上で、両作を読んだ読者だけが味わえる面白みもまた自ずから生まれてくるということであ

る。

筋が複雑化した長編の後期読本・合巻時代に入る直前に於いて一九は、筋の繁簡に囚われることなく、同じほどの文字数^注で両ジャンルを表現してみようと試みたのである。器用な一九がなせる技である。むろん判り易い用語を用いるかどうか即ち文章の難易、または会話に口語を用いるか文語を用いるかというのはジャンルの性格上、後期読本・合巻同様に『深窓奇談』・『美男狸金箔』の相違点でもある。

画心が有る一九は挿絵に於いて、『深窓奇談』では術学的文章に合わせたかのようにおどろおどろしい雰囲気を出し、『美男狸金箔』では卑俗の話題を好む作中人物たちに合わせて挿絵もあけらかんとした感を出す。女主人公において読本の受動的人物像、黄表紙の能動的人物像が文章だけでなく挿絵でも描き分けられている。読本の絵解きとしての黄表紙の特性を、自画作の自在さで一九は遺憾なく発揮出来たのである。

また、享和二年の一九の他の作品にあれほど充滿する滑稽が、『美男狸金箔』ではわりあい使われていないのは、読本と共有する世界を描いた黄表紙だからであろうか。しかし前期読本の怪談の世界を扱いながらも、読み応えがある、即ち黄表紙として何ら遜色のない作品に出来上がっているのは、全く一九の才能からと認めていいだろう。

この『深窓奇談』の他、享和二年に一九が出した読本「中

『古奇談雙葉草』『列国怪談聞書帖』も全部半紙本型であった。一九が中本型読本の多作者になるのは文化に入ってからで、寛政期に既に振鷲亭・馬琴等が中本型読本を旺盛に出していたのにも拘らず、享和期一九が読本に手を染めるスターラインに於いては半紙本型だったということは、何を意味するのだろうか。一九の意識の中で読本とは、まだ格調高い知的な小説というジャンル認識が活きていて、主に中国白話小説を翻案するという方法により、上方の知識人の手で作られた短編怪談奇談集、即ち前期読本に学ぶところが多かったからと思われる。

しかし、一九の知識は半紙本型読本には適したものでなかっただろうし、仕込みの経済的負担が軽いということ書肆側からも要求されただろう平明な内容の中本型読本を、文藝化期に入り出し続けることになるのである。不特定多数の享受者を対象とするために、より普遍的な立場が求められ、時には既成のジャンルの枠を超越したり、ジャンルの境界に立ったりして、後には黄表紙へ合巻へ滑稽本へ人情本へ横断する中本型読本を、最も多く刊行するという業績を残すに至るのである。

二 「絵本太閤記」と「化物太平記」

以上は同年同作家即ち、享和二年に一九が刊行し、同世界

を扱った読本と黄表紙を読み比べることによって、世間一般のジャンル認識に基づきながら、一九がどのようにして焼き直しを成功させていたかを覗いてみたものである。そして、又江戸戯作の根元的手法の一つである「翻案」(広義の焼き直し)の仕方を、一九はどのようにこなしていたかを探るための好材料として『化物太平記』がある。

この享和四年の一九黄表紙『化物太平記』^{注7}は、寛政九年の武内確斎作・岡田玉山画の読本『絵本太閤記』^{注8}の初編三巻までを翻案したものである。即ち、他作家の先行読本を黄表紙化するその翻案の手法が調べられる作品なのである。

まず一九が選んだ題材は、「日吉丸小六に見ゆ」である。『化物太平記』で「岡崎の橋にて蛇河虎に見る話」と目録を付けたところで、挿絵がまさに橋の上の出会いの場面であるが、読本の方の小六が連れている手下の人数を、黄表紙の方ではぐっと三人に減らして、広大な元の構図を小六河童と日吉丸蛇だけに狭めて集中させるような絵になっている。

原拠文章との具体的な比較検討によって、一九の特色はむしろ黄表紙の特色もはっきり表れるだろう。上段に読本の文章を、下段に黄表紙の文章を挙げることにする。

『絵本太閤記』	『化物太平記』
爰に尾州海道郡の住人、蜂須賀小六正勝といへる者あり。	ここに三河の国岡崎川のほとりに住む河童有り。

<p>乱れたる世の習ひにて、近国の野武士を語り、東国街道に徘徊し、落武者の武具を剥取、人家に押入、財宝を奪ひ、其手下に属する者一千余人、勢ひ近国に震ひける。</p>	<p>年久しく劫虜経て、いろ／＼に術をもって身を変じ、化物仲間頭の頭となり、手下の化物大勢を従え、切取強盗をなして世を渡りける。</p>
<p>或夜属手数多引具し岡崎橋を渡りけるに、彼日吉丸此橋の上によく寝て、前後を知らず有けるを、小六通りざまに日吉丸が頭を蹴て行過る。</p>	<p>ある夜、岡崎の橋の上を通りける時、一つの小蛇橋の上に丸くなりてよく寝入りたるを、河童思はず尻尾を踏んで通りければ、</p>
<p>日吉丸目を醒まし大きに怒り、汝何奴なれば不礼をなすや。我幼稚と雖も、汝が為に恥しめを蒙るいはれなし。我前へ来り、礼をなして通るべしといふ。</p>	<p>蛇目をさまし腹を立て、何者なれば我が尻尾を踏んで、断り無しに行くぞと言う。</p>
<p>小六驚き立寄りみれば十二三才の小兒なりければ、心に甚恐れ、思はざりし不礼を謝し、さても汝、何国いかなる者の子なるぞや。幼き身として不敵の一言感ずるに余有り。我に随ひ奉公せば、厚く恵みて召使ふべし。……</p>	<p>河童聞きて、さて／＼小蛇の分としてしおらしくもとがめたり。我と一緒に來たるべし。見所する奴、我が手下になし、使つてくれんと、かの小蛇を召しつれて帰りける。</p>

黄表紙はこれでこの場面の幕を閉じる。しかし読本の方では、日吉丸を手下にした其の夜、早速或富豪の家に押し入るが、槌を以って戸を破ろうとするのを、日吉丸は首を出してはいけないと、大木を伝ってよじのぼり、奥に入って戸を開けたり、一人逃げ遅れた時、井戸に石を投げ込みあつと叫び、盗賊が落ちたと捕手が集まった隙に、逃げるといった逸話がつけ加えられている。

このように筋を損なわないことはもちろんのこと、文章までが忠実に写されていることがわかる。ただ読本の文章をより簡略かつ平易に移し変え、人物を化物に設定することによる読本にはなかつた滑稽を与えたのが一九の黄表紙のようである。筋書きの上では全く笑いと無関係である、歴史上の人物たちを一瞬にして化物にしてしまったことから、世界を知る読者が其の趣向に笑うのである。とぐろを巻いた日吉丸小蛇が頭をもたげて刃向かうと、驚く小六河童と、各々ふざけた台詞を吐きながら騒ぐ手下化物たちの表情が豊かでユーモラスなのである。

次の場面からは、読本の文章をそのまま持つてくるという仕方から離れ、ある程度自分の言葉でまとめて表現して行くこととする。『繪本太閤記』では小六から秘蔵の刀青江村正を「三日のうちに盗みとらば、汝の物となして帶すべし」と言われた日吉丸は、三日目の雨の夜、雨垂の下に笠ばかりを捨て置いて人ありと見せ掛け、小六が息を詰めている間、自分

は寝所に帰り、小六が疲れて机の上に伏していた夜明けに盗みだすという話であった。

この「小六日吉丸が智を考ふ」は、『化物太平記』の目録の「河太郎口繩の智を診す話」のところで、「なんじ、我が尻子の玉を抜くならば、ほうびは望み次第也」と、河童に言われた蛇が「今宵御身の尻子の玉を抜くべし」と請け合い、庭先でずっと物音をさせて河童を用心させ、明け方になりもうよいと心ゆるんでまどろむ間、尻子の玉を抜くという話へ、素材だけを換えて載せている。挿絵も原拠の構図と全く一緒であるが、さすが自分の脚色は意識していたと見え、雨は省略、化物屋敷らしく草ぼうぼうの荒れ果てた建物を描いている。

『化物太平記』ではこの場面に続いて、尻子玉を抜かれた河童が、着物をはしよって自分のお尻を同僚化物に見せながら悔し涙を流すという卑俗な設定と、お互いの着物の裾を捲ろうとする子供遊びとをひっかけた黄表紙らしい猥雑なおかしみを狙った場面が付け加えられている。

『繪本太閤記』初編巻之一の全七話からは、以上の二話が黄表紙の世界として選ばれていた。一九にとつてはこの二話がエピソード的に黄表紙へ翻案するに於いておもしろかったのだろう。

巻之二からは順を追って、先「藤吉郎尾州に趣き鎧を需んとす」が、「野干口繩に黄金を掠めらるゝ話」へ趣向換えす。藤吉郎の尾州に趣くに当たつての妻をめとつてまた離縁

する話は全部省略され、次の部分だけピックアップされて黄表紙になる。

或時加兵衛、藤吉を召て、今尾州織田信長が家に、桶側にあらざる、胴丸とて右の脇にて合せ、伸縮自由なる鎧を用ふる由、汝が故郷なれば、織田家にたより、此鎧を調へ來たるべしと、黄金六両を出し、鎧の料にあて與ふ。という逸話が、

(松が浦の可平) 狐化けること奇妙にて、ふだん武州鈴が森の鬮體をかぶりけるが、この鬮體こわれければ、新たに蛇に言い付け、木の葉小判六両渡し、武州鈴が森の鬮體を調え來たるべしと言い付けける。

と、パロディ化するのである。戦国武将にとつて鎧が必需品なら、狐にとつて鬮體は人を化かすための必需品だということとでこのもじりは成立する。挿絵は狐と蛇の対面距離を原拠より狭めて二人にポイントを当てることにより、原拠の松下加兵衛屋敷の広さをなくしている。

信長の奇行を表すエピソードの一つとして挙がっている『繪本太閤記』の「信長千僧供養」は、『化物太平記』目録では「千僧供養の話」として載せられる。関所を構え、往來の僧を手あたり次第捕らえて置いて、父の仏事に当たり千僧供養をさせたという読本の趣旨を、黄表紙の詞章はそのまま継いでただ簡略にまとめているだけであるが、挿絵は原図の構図を用いながらも、胸倉を捕まえられた化物僧たちの姿と表

情のおかしさに腹を抱えさせる。もともとは同情すべき哀れな僧たちの姿だっただろうに、一九にかかれればこのように道化役に廻されてしまうのである。化物の関所であるので雑草が茂って荒れている。武士化物に捕らえられ、ふんづけられながらも逃げようとする化物は、

ヤアおのれら、逃げるるとて逃そうか。とてもかなわぬ、吉原の大門で、新造子にとっつかまえられたも同じこと。サアくちよいと来なさい。ちいくくくだ

に対応して口答えするのであるが、あれさ、悪くふざけなざる。いっせじれってえぞよと、遊女の言葉使いでとぼけた返事をしているからもっと可笑しい。挿絵の場所は今まで見てきた他の挿絵同様狭まっている。そして織田信長の性格を一言で形容して『化物太平記』では、「無間の鐘をつきたる者を責め苛むなめくじりのお頭有り」と、よく黄表紙の素材として登場する無間の鐘を用いて、読本の「信長高祖」という一話をも黄表紙らしくまとめってしまった。

『絵本太閤記』の「織田信長と斎藤道三と正法寺に会す」は、『化物太平記』の目録には載っていないが、本文には原図を最も忠実に再現させた（人数とか距離感覚、人物のポーズという面で）と言える挿絵とともに取り上げられている場面である。

鉄砲三百挺、左右に列し、次に三間柄の朱鎗三百筋、是

も同左右に備へ、其次に歩行者百余人、悉く赤き装束著し、馬前を守護す。

という物々しい行列を、ただ

長柄の槍の気取りにて、ろくろ首大勢に首を伸ばさせ、幾人となくこぎように行列を揃えて打ち通りける。

というふうにはパロディ化、茶化した詞章に合わせ、長槍代わりに木立越えにろくろ首で行列を作らせる。その首たちが吐く各々のわがままな台詞が滑稽極まりない。それが一九が目指した趣向であろう。『絵本太閤記』で信長は、勇になる斎藤道三に会うためにこの異様のおびたしい行列を作ったものなので、その後二人の対面まで順序立てて述べられているが、黄表紙の趣向はその行列自体を材料にしたかっただけなので、その後の対面の場面がなくても不自然ではないように、行列は「隣国他国へ往來の時」作った、というふうにいまいにされている。

『絵本太閤記』の「藤吉郎小牧山の樹木を算ふ」は、『化物太平記』の目録に「口繩小巻山の樹木を算える話」として載る。読本では藤吉が信長の気に入れられ、次々御馬飼、草履取、台所奉行と昇進していく姿が描かれるが、黄表紙の方では一切そういう具体的な描写は省かれ、藤吉の頓智を示す逸話として、山の樹木を数える話を茶化して載せているだけである。

藤吉郎工夫を以て、細き繩を三尺許に切て木の根に結び

付、総繩数何程と定め置き、残りし繩を算みれば、一本も相違なく、最易く数え終わる。

のであるが、黄表紙では蛇の特性を生かした見立ての表現が、繩という元の材料をうまくもじっていて、挿絵とともにおかしみを醸し出している。

蛇は、仲間の蛇どもをおびただしく集め、幾匹と数をきわめ、一匹ずつ木に巻きつかせて残りたる蛇を教え、樹木の数を知りたる

と、全く同じ文章を使いながらも、繩から蛇へとの転換を見事に成し遂げている。原図の山に入った藤吉の一行が樹木に繩を括り付けている風景、そして蒼蒼とした山の広大な景色は、もともと黄表紙の半丁の挿絵に収まる性質のものではないので、一九は構図の変革を試みて、三本の樹木の間で一人で立った藤吉蛇が仲間蛇たちを指図しているような狭い空間へ換えている。これは『化物太平記』の中で一番原図と異なった構図のように見えるが、原図の匂いを消し切ることはできないように思える。それは典故から離れられない一九の限界だと現代の研究者たちは規定するかも知れないが、その以前に典故から離れることを望まなかったかも知れない大衆読者の存在を忘れてはならないだろう。

『繪本太閤記』初編卷之二からは、以上の四話の他に「修行者藤吉郎を考相す」と「藤吉郎信長卿に見参す」をも含めた六話が『化物太平記』の中に翻案されていた。

そして『繪本太閤記』初編卷之三からは、先「藤吉郎普請奉行」が翻案され、原図の酒肴を振る舞われ賑やかな様子の場だったのを、命令を聞くために化物たちが白州に畏まっている場へと転換させるといふ趣向を見せた後、『繪本太閤記』の「割普請の法破損を治む」が、『化物太平記』の目録「口繩割普請手柄の話」として載っているところへ繋がる。読本では普請が無事成功するまでの工事過程を

棟梁の下知に随ひ、己々が場所を割付、一坪に五人づゝと定め、息をも継がず、汗水に成て、働きける、藤吉郎是を見て心中に甚だ喜び、……別に貳百人の工夫を以て、土砂を運び石を荷せ、又三十人を以て臨時の用事を達しければ、半日の間に石垣全く成就し、……直に柱立てに取かゝり、早左官ども壁を塗り、其明日に至っては、塀、櫓に至迄、残りなく成就す

のように、詳しく述べるのであるが、例の如く黄表紙では一間ずつと割りつけ、大工人足そのほかそれ／＼に指図して油断なく働かせ、遂に城の普請成就しける。

と判り易くまとめあげている。挿絵は一九の趣向がうまく生きていて、原図では城壁の上で働く人足たちが密集した蟻のように小さく見えるのであるが、その遠望の広大な光景を、望遠鏡で覗いたように一部分だけ拡大した風景にしている。材木を積んだ大八車を押して石段を上る人足たちは、黄表紙でも同じ車を化物たちが押して今度は坂道を上っている。そ

して工事現場を視察するために訪れた織田信長らしき人物に畏まって報告する藤吉という所は、詞章に取り上げられていないので挿絵にも省略される。その代り

夜は狐火を灯し、あるいは人魂などの光にて材木を引き入れる

という詞章を付け加えることにより、黄表紙らしい滑稽を狙い、口に火を加えた狐人足等をも描き入れ、原拠にはないが化物らしく夜まで一所懸命工事に取り組む姿勢を見せてうまく茶化している。

『繪本太閤記』の「福富平左衛門笄を失ふ」は、『化物太平記』目録に「口繩無実の災難に逢話」と載った所であるが、本文では二話に分けられている。先は平左衛門が佐矢川の陣中で細竜を彫った黄金の笄を紛失し、或る人から藤吉が盗んだと言われ、彼を疑うようになる場面である。原図にはない挿絵を『化物太平記』で唯一一九が創作して描いている所でもある。割笄を失った猫又が、鼠料理を舌づつみ打ちながら、箸で挟んで食べようとしているところ、狸化物から盗んだ犯人は蛇だと告げ口されている場面の挿絵であるが、猫又と割笄、箸、鼠等、縁語をうまく駆使して黄表紙化している。

続いての場面は、無実を晴らすべく津島の堀田孫右衛門という質屋に潜入した藤吉が、笄を質に入れに来た足軽体の者を捕らえる場面である。ここまでは殆ど読本・黄表紙同様の筋書きであるが、読本では軽率に人を疑ったとして平左衛門

は織田信長に勘当されそうになったが、藤吉によって引き止められるという話が、黄表紙では猫又がだだなめくじりに大いに叱られたというくらいに柔らいでいる。

挿絵は最も原図を忠実に写していて、鎧姿の藤吉蛇に組み伏せられている足軽体の化物、驚いたポーズの孫右衛門の竜、見物客らしき二人の化物のやはり驚いたポーズは勿論のこと、お互いの位置関係までが全く一緒である。今まで見てきた通り『化物太平記』の他の挿絵は、読本の原図の距離を短縮させる等して登場人物の数を減らし、場所をも狭め、集中・縮小させるといのが基本趣向であった。それがこの場面の挿絵では人数も原図と変わらず、従って店の広さも変わっていないし、質屋の置物である大福帳、貫差、そして盗まれた笄も原図と同じ位置に描かれている。このように登場人物をただ化物に置き換えただけの挿絵であるが、蛇に抑え付けられながらも「ほんのこうがい先に立たずとはこのことだ」と、地口でとぼける化物の台詞等に、読本にはない趣向が有るのであろう。

最後では『繪本太閤記』の三つの話を纏めてしまう。即ち、「藤吉郎計策を献ず」「信長岩倉城を抜く」「堀尾茂助力戦」を一つにして、藤吉の献策で岩倉城を陥落したという読本の長い話を、

蛇計り事をめぐらし、たちまち敵方を追い崩し、遂にその城を乗取り、高名をあらわしける。

というふうには、抽象的に纏めてしまっているのである。

挿絵は「堀尾茂助力戦」の原図に模しているようであるが、勿論岩倉城方の堀尾茂助が戦う姿は、黄表紙の詞章では述べられていないので、挿絵に彼は除かれている。逃げる軍勢の化物たちは原図と同じ仕種をしているにもかかわらず、一九の化物特有のユーモラスな表情を与えられたことによつて、原図の悲壮感から欠け離れた滑稽感を醸し出している。

また各々吐く彼らの逃げ台詞も、笑いを誘うのに一役買っている。読本の三つの話を纏めたこの一話の本文に対して、『化物太平記』目録では「佐屋川合戦の話」「同落城の話」「口縄立身加増の話」と三つに分けて載せている。

以上、見てきたように、読本をダイジェストした合巻が登場する前に、先立って著わされたのが『化物太平記』だと言える。原拠の用語をそのまま用いたりしたところから、一九の獨創性に満ちた趣向は捜せないが、読本の文章をある程度自分の言葉で纏めて、簡略且つ平易に表現しようとする努力はなされる。

筋書きを損なわない、というのが一九の翻案の基本方針だったので、筋書きの上では笑いと全く無関係な歴史上の人物たちを化物にすり替え、原拠の行動をも化物らしい行動にもじることによって、歴史読本にはなかった滑稽を一九は黄表紙に与えた。例えば、とぐろを巻いた日吉丸小蛇が頭をも

たげて刃向かうとか、普請に懸命に取りかかっている化物たちの姿を形容するために、口に火を加えた狐人足を画き足すことによって、夜まで働ける化物の属性を表現したりするのである。

行動と共に彼らが吐く台詞が、又化物らしく惚けたたわいなものであって、原図同様のポーズ、例えば逃げるというポーズを取りながらも、お坊さん化物曰く「モシ／＼わたくしは尾籠ながら腹くでござりますから、ちょっと雪隠へ行つて参りましょう」、兵士化物曰く「よい／＼、わい／＼。逃げるはこっちの株敷だ」「気のきいた化物は、もう足を洗つて引込む時分だ。おさらば／＼」と戯れてしまう。元々は同情すべき哀れな境遇であったり、悲壮感溢れる瞬間であったはずのものも、一九に掛ければ一道化役が演じる戯けた場面へ転じてしまうのである。

又、彼らに化物らしい行動をさせるために持たせる道具という、刀の代わりに尻子玉、鎧の代わりに鬮籠、長槍の代わりにろくろ首、縄の代わりに蛇、という具合で卑俗化される。

原図と変わらない構図でありながらも、対面距離を短縮したり、人数を減らしたりして、場所を狭め、集中・縮小させるとか、望遠鏡で覗いたように一部分だけを拡大するとかいう変革も試みられている。

一方、重くなりがちな読本の雰囲気や和らげ、滑稽感を醸

し出すため、一九は猥雑なおかしみを狙い尻子玉を抜かれた河童の後日譚を創作したり、縁語を上手く駆使した猫又の挿絵を創作したりする、等々の一九なりの趣向を工夫していた。

そして黄表紙としての穿ちないし茶化しというのが、台詞を始めとした根本でしっかり働いている作品になっているのである。

多作を成し遂げるために一九が採った方法の一つは、以上のような焼き直し、翻案であったが、享和期焼き直された一九の読本と黄表紙を対照することによって又分かったのは、まだ、読本を簡略化した合巻という図式が生まれる前の、享和二年の処女作の読本(『深窓奇談』)と同世界の黄表紙(『色男狸金箔』)を創出するに当たって、各々のジャンルの特性を生かしていたということである。それから二年後になると、合巻に先立って黄表紙(『化物太平記』)で読本(『絵本太閤記』)の簡略化を実践しているのである。一九と言えば、ともすれば安易な著作姿勢だけが指摘されがちだが、このように時勢に先駆けた彼の動きは評価していかなければならないと思ふ。

注

(1) 底本は大阪府立中之島図書館蔵本を用いた。

(2) 底本は上田市立図書館花月文庫蔵本を用いた。原文にない句読点を自分で適宜補う。

(3) 『中村幸彦著述集』第六巻、中央公論社、1982年。『深窓奇談』巻四の「重成暗中狐鬪諍看」を草双紙化して、一九は翌年の享和三年「木がら社がら野狐復讐」を出している、という指摘もなされている。

(4) 高木元『江戸読本の研究』、ベリかん社、1995年

(5) 享和二年の一九洒落本から例を挙げると、『狐竇遁入』…

「**権**一九が銚子から。つれてきた。げいしやをよびにやるふか**ちや男**藤四郎のことござりますか。此ごろのはやりこで。けふはわたくしどもの客人と。ゑどのほうへめへりました。」というふうには、『美男狸金箔』同様、話題人物として賞賛の対象になっているが、次の二つの享和二年洒落本には直接登場人物として藤四郎は顔を出す。『藪学問』…「**其**撥の**月**は。去年から栄蔵と相仕で出る。藤四郎が妙なものだ**月**ほんにきゃつが。中の丁をまはるとき。伊勢屋にいて見やしたが。げいしやの引札も。いつのまにか。板行になりやした。」この後、**男**げいしや藤四として登場してくるのである。『素見数字』…「**げい**もし。きよねんから出たげいしや衆に。とんだいたごぶしの。上手ながおさいますよ **ちやや女房**ソリヤア一九さんが銚子からつれて。来さした人さ **げい**さやうさ。藤次さんの弟子だそふさ **五**ラヤそのげいしやは何といふ **げい**藤四郎と申ます…**萩江藤四郎**わたくしを。およびなさは。あなたでござりますか **五**一九が

- ひいきにやってくれろと。くれくもたのんでいた。相仕はだれだ [藤] 栄蔵でござります [酒] ソリヤアきつとした釜だはへ。」というように同じ宣伝文句を繰り返す。
- (6) 字数を数えると、大体読本『深窓奇談』は4970字余り、黄表紙『美男狸金箔』は、筋書きに関係ない最後の口上の丁を除いて、地の文だけで4060字余りである。
- (7) テキストは『江戸の戯作絵本』四(小池正胤編、社会思想社、1983年)を用いた。
- (8) 底本は河野信一記念館蔵本を用いた。
- (9) 小池正胤氏の前掲書他、『古典文学大辞典』の「化物太平記」の解題による。